九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The evaluation of rectal mucosal punch biopsy in the diagnosis of Hirschsprung's disease: a 30-year experience of 954 patients

吉丸, 耕一朗

https://hdl.handle.net/2324/2348710

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏　　名：吉丸　耕一朗

論　文　名：The evaluation of rectal mucosal punch biopsy in the diagnosis of Hirschsprung’s disease: a 30-year experience of 954 patients
（　ヒルシュスプルング病の診断のための直腸粘膜パンチ生検の評価：30 年間 954 例の経験　）

区　　分：甲

論　文　内　容　の　要　旨

【背景】小児期に発症する便秘症で代表的な疾患に、腸管壁内の神経節細胞が欠如することで腸管蠕動不全を呈するヒルシュスプルング病（本症）がある。本症の神経節細胞欠如領域は肛門側から連続することから直腸組織にて病理学的診断が可能であり、その組織採取手技として直腸粘膜生検が広く行われ、世界的には吸引生検が主流である。一方でわれわれは 30 年間、継続的にパンチ生検を施行してきた。本研究の目的は、本手技の安全性を評価することである。

【方法】1986 年 4 月から 2016 年 3 月までの間、当科および関連施設にて、本病が疑われ S-moid 鉗子と非特異的採血管を使用した本来の「K-PUNCH」法を含め、パンチ生検を受けた患者を対象とした。 われわれのパンチ生検技術は、優れた視認性と直接的な把持感を特徴としている。患者の背景と合併症を後方視的に検討した。

【結果】対象期間中、954 人の患者（年齢中央値、4 ヵ月;範囲日齢 1 日~73 歳）がパンチ生検を受けた。 重篤な合併症（直腸穿孔、感染または全層生検）の症例はなかったが、対象期間初期の 1 例（0.1%）は、生検後輸血を要する出血を認めた。 加えて、37 人の患者（3.9%）において不適切な検体採取となっていた。

【まとめ】「K-PUNCH」法を含むパンチ生検は、すべての年齢層の患者に対し、安全に実行可能であると考えられ、合併症や不適切な検体採取の割合が低い。出血を含む合併症は、常に考慮する必要がある。